

秋建時報

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

秋建時報

平成25年5月1日(第1228号)

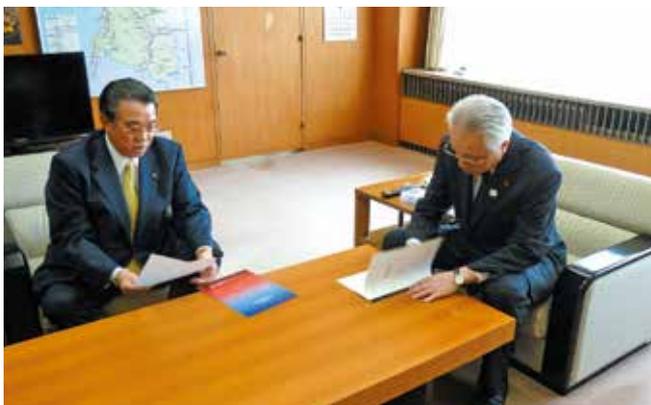


発行／(社)秋田県建設業協会
秋田市山王四丁目3番10号
TEL 018(823)5495
FAX 018(865)2306

協会

秋田県知事・建設部長を訪問

低入札調査基準価格と最低制限価格の引き上げを要望



4月10日、村岡淑郎会長が秋田県庁を訪問し、堀井啓一副知事、富田耕司建設部長に秋田県発注工事に関する要望書を手渡した。

今回の要望は、今年2月から6月にかけての補正予算、また、国における防災・減災対策推進による公共事業予算の拡大される中で、県内建設企業の財務内容が改善傾向にあるものの依然として赤字基調にあることから、産業政策として低入札基準価格と最低制限価格の引き上げを求め、県が今年策定した「秋田県建設産業振興プラン」に則った県内建設企業が健全な企業体を維持しながら、期待されている役割を果たせる環境づくりを求めるもので、村岡会長は建設業の現状などの説明と併せ、「秋田県建設業協会ビジョン」を示し、県内建設業が今後向かっていくべき方針について説明した。

協会・建災防・技士会・事協組・土地改良

平成25年度 各団体理事会・総会

新年度予算等を承認

4月25日、秋田県建設業協会を始め、建災防秋田県支部、秋田県土木施工管理技士会、秋田県建設事業協同組合連合会、秋田県土地改良建設協議会の5団体が新年度の理事会並びに総会(代議員会等)を秋田キャッスルホテルにおいて行った。

秋田県建設業協会の理事会・協議員会では、今年度の表彰候補者、総会への提出事項を協議。各議案が原案通り承認され、定時総会に提出される運びとなった。

また、協会が行う事業においては、先の4月10日に秋田県に対して要望活動を行ったことが報告されたほか、理事から秋田県の技術力評価における企業評価のウエイトを高める要望を要請する発言があり、全会一致をもって賛成となり、今後、秋田県への要望を行う事とした。



議事

- 1) 表彰候補者について
- 2) 定時総会へ提出する事項について

【決議事項】

- 第1号議案 理事・監事の選任の件
第2号議案 平成24年度貸借対照表及び正味財産増減計算書及びこれら付属明細書承認の件

【報告事項】

- 第3号議案 平成24年度事業報告及び事業報告の付属明細書報告の件
第4号議案 平成24年度公益目的支出計画実施報告書報告の件
第5号議案 平成25年度事業計画並びに収支予算報告の件

新規学卒入職者研修会を開催

『社会人としての心構えについて』

新入社員の基本マナーと建設業の基礎知識を学習



秋田県建設業協会は、「平成25年度新規学卒入職者（新入社員）研修会」を4月25日に秋田ビューホテルにおいて開催した。

研修会には、この春会員企業に採用された新規採用者100人のうち60人が参加した。

初めに村岡淑郎会長の講話が行われ、「建設業はただ単に公共事業を受注するだけではなく、災害が起こった時のライフラインの確保や復旧活動等、常に地域の安全・安心を守る業界として欠かせない。建設業は本当に素晴らしい職業だと思う。秋田県の建設業界を取り巻く現状は公共事業費の削減、長期にわたる景気の低迷によりそのシワ寄せが建設労働者や技能者の賃金に及んでいる。さらに建設業就業者数の減

少と高齢化、若年労働者の就業割合の減少、入職後三年以内の離職率が高いなど、大変厳しい状況になっているが、秋田県のこれからの建設業は自分が背負っていくという気概をもって前に進んでいただきたい。働くことは難儀なこと、仕事で楽なことはひとつもない。簡単に離職を考えず早く職場や仕事に慣れ、先輩や同僚とよくコミュニケーションを取りながら楽しく仕事をしてほしい」と、新入社員に対して仕事に対する心構えを説いた。

村岡会長に続き堀井啓一秋田県副知事が登壇し、「土木、建築、水道設備等広範に及ぶ建設業の仕事は秋田県の県土を守り、住民の生活を守っていくために欠かせない仕事である。これから高齢者が増えていく中で各地域において災害や豪雪が起きた時にすぐに現場に駆けつける、力を注いでいただくことがますます重要性を増してくる。建設業という仕事は大変地味で緑の下の力持ち的な仕事であるが、県民の生活を支えていくにはかけがえのない大切な仕事に携わっているという誇りを持って頑張っていたいただきたい」と述べ、建設業への期待とエールを送った。

研修は（株）日本コンサルタントグループの酒井誠一氏を講師に迎え、社会人としての心構え、建設業界の基礎知識、新入社員の基本（身だしなみ、挨拶、敬語の使い方）について、午後からはグループに分かれ、建設業界の仕事の流れについて設計図や見積書、工程表の作成、安全管理、施工検査など与えられた役割についての責任と協力して仕事を組み立てていくことについてゲーム感覚で学んだ。



平成25年度前期

安全衛生教育等のご案内

建災防秋田県支部では今後、次の安全衛生教育等を実施して参りますので、皆様のご参加をお待ちしております。(下表、種目・開催日順)

開催要領等の詳細、受講申込書は建災防秋田県支部Webサイトをご覧下さい。

<http://www.a-kenkyo.or.jp/jcosha/index.html>

《運転等技能講習》

講習種目	開催日・会場
不整地運搬車	6月3日(実技:4日) 秋田テルサ 秋田市御所野地蔵田3-1-1 (実技会場:建災防教育講習所)
車両系建設機械 (整地・積込・ 運搬及び掘削用)	6月10・11日 (実技12日又は13日) 秋田テルサ 秋田市御所野地蔵田3-1-1 (実技会場:建災防教育講習所)
車両系建設機械 (解体用)	6月14日(実技:同日) 秋田テルサ 秋田市御所野地蔵田3-1-1 (実技会場:建災防教育講習所)
小型移動式 クレーン	6月19・20日(実技:21日) 秋田テルサ 秋田市御所野地蔵田3-1-1 (実技会場:建災防教育講習所)
	6月25・26日(実技:27日) 大館労働福祉会館 大館市豊町2-37 (実技会場:同会場・駐車場)
玉掛	7月1・2日(実技:3日) 大館労働福祉会館 大館市豊町2-37 (実技会場:同会場・駐車場)
	7月9・10日(実技:11日) 湯沢文化会館 湯沢市字沖鶴103-1 (実技会場:同会場・駐車場)
小型移動式 クレーン	7月24・25日(実技:26日) 秋田テルサ 秋田市御所野地蔵田3-1-1 (実技会場:建災防教育講習所)

《特別教育》

講習種目	開催日・会場
小型車両建設機械 (整地・積込・ 運搬及び掘削用)	6月6日(実技:7日) 秋田テルサ 秋田市御所野地蔵田3-1-1 (実技会場:建災防教育講習所)

《作業主任者技能講習》

講習種目	開催日・会場
コンクリート 工作物の 解体等	5月30・31日 秋田テルサ 秋田市御所野地蔵田3-1-1
地山掘削 及び 土止め支保工	7月17～19日 秋田テルサ 秋田市御所野地蔵田3-1-1
建築物の 鉄骨 組立て等	8月8・9日 秋田テルサ 秋田市御所野地蔵田3-1-1
足場の 組立て等	8月22・23日 秋田テルサ 秋田市御所野地蔵田3-1-1

《安全教育等》

講習種目	開催日・会場
熱中症対策 安全衛生教育 (管理者)	6月24日 秋田テルサ 秋田市御所野地蔵田3-1-1
職長・安全衛生 責任者教育	8月1・2日 秋田テルサ 秋田市御所野地蔵田3-1-1
足場の組立て等 作業主任者 能力向上教育	8月30日 秋田テルサ 秋田市御所野地蔵田3-1-1

秋田・鉄路の情景

Vol.
7

「車窓を楽しむ電車旅」

701系セミクロスシート車



文と写真／加藤隆悦

フリーカメラマン兼フリーライター
取材・執筆歴／旅の手帖、WoodyLife、
ベンチャー・リンク、郷、ある他
海外取材歴／ドイツ、アメリカ、ブラジル
写真塾・写楽 主宰／写真教室、撮影ツアー
企画等

秋田県内のJRの電化路線を走る普通列車はすべて701系という電車で統一されている（未電化区間に乗り入れる気動車列車を除いて）。

701系の秋田地区への投入は1993年6月だそうだから、今年でちょうど20年になる。それまでは電気機関車の牽く客車列車だったから、701系の登場で秋田の鉄道シーンもちょっと“都会っぽく”なった、とは言える。性能の向上でスピードアップが図られたのも大いに歓迎したいところ。

しかしそれと同時に、701系には“イマイチ”という評価もある。製造コスト削減のためか、窓にはシェードもカーテンもない。スモークガラスにしているとは言え、強い陽光が差し込むと遮るものがないのだ。それに、客席と乗降ドアを仕切るデッキがないため、冬場は駅に着いて人が乗り降りするたびに車内に冷気が吹き込む。これは実際、設計ミスと言ってもいいほどの深刻な問題だと思う。今の時代、一般家庭ですら風除室というものを備えているのに、これではまるで、リビングルームと外をドア一枚で隔てているのと同じことだから。

もう一つ、都会の通勤電車並みに窓を背にして座るロングシートの座席配列に不満を漏らす向きもある。筆者などは車窓に流れる景色を眺めながら鉄道旅を楽しみたいほうだし、できればそうやって車窓風景を眺めながらビールを飲んだり駅弁を頬張ったりしたい。のどかな秋田の風土なのだから、列車で移動する時はそれくらいはやりたい。

そういう鉄道旅の楽しみを奪ったのが701系でもあるわけだ。

秋田・新庄間のいわゆる奥羽南線には、片側ロングシート、片側ボックスシートに改造されたセミクロスシートと呼ばれる座席配置の701系が3編成あるらしい。

編成本数が少ないために出会える機会はとても少ないけれども、駅で列車を待っていて、入ってきた電車がこのセミクロスシート車だったら、急いでKIOSKで缶ビールを買って、大いに車窓風景を楽しみながら痛飲するべきである。滅多に体験できない僥倖なのだから。

文学の世間話をしよう

あゆかわのぼる

私事で恐れ入るが許していただいて。

春の宵、千秋公園の茶屋に六人ほどの中年男女が集って酒を飲んだ時のことを話そう。

そのメンバーの中に中年後期のジャーナリストがいて、その人が突然、

「あゆかわさんのあの小説にはショックを受けたナア」

と言った。メンバーがきょとんとして私を見た。私も何のことか分からずポカンとしていると、彼は続けた。

「地元の週刊新聞に連載された、アノ小説ですよ」

思い出した。(そうか、そんなことがあった)

彼はさらに、

「地方にはたいい小説の同人雑誌が何誌かあって、小説家を目指したり趣味で書いている人がそこに作品を発表する。しかし、一般の人が読む機会は余り多くない。読む機会があっても変に難しかったりひとりよがりだったりして付き合いにくい。あゆかわさんのあの小説は、いい意味でも悪い意味でもそういう作品とは趣を異にしていた。毎週待ち遠しかった」。

ちょっと冷や汗をかき、せつかくの酔いが少し醒めたが、思い出した。『向い風』というタイトルだった。帰宅してスクラップを捲ってみると、1995年9月29日号から1996年11月22日号までの1年2か月ほど連載し、2001年3月にイズミヤ出版から単行本として出版されている。それ程売れず、すでに絶版になっているだろうが、帯のキャッチコピーが“降格 左遷 リストラの嵐 その陰にうごめく男と女”という禍々しいもので、「企業戦士ザンコク官能物語」とサブタイトルがついている。セックス描写もある、虚仮脅しもはなはだしい小説である。

中年後期のジャーナリストは、その頃、転勤で初めて秋田に来て、その小説と出遭い、それまでの新聞記者として見てきた“地方の小説家志望の人が書く小説”という既成概念から外れたエンターテインメントと、地方都市の企業とかビジネスを知る上で参考にもなった、というのである。

当然それは読み過ぎだが、他の人たちはその小説を知らないようだし、なによりも、私がかつて小説を書いていたということすら知らない。怪訝な顔である。

私は40年くらい前、小説を書くことに興味を持ち、地元の小説同人雑誌の門を叩いた。そしてその雑誌に原稿用紙30枚くらいの短編小説を3～4篇書いた。しかし、とても小説とはほど遠く、手に負えない世界だとあきらめて、やがてこっそり抜け、詩の傘の下に戻った。

ところがその小説の同人雑誌の先輩が週刊新聞の編集長

になって、時々私に雑文を書かせてくれ、これがきっかけで、若い女性記者が、ある時、

「小説を書いてみないか」

と誘ってくれた。何人かの書き手がいて代わり番こで1回5枚、5回くらいの小説を書いていた。私も3本ほど書いたが、やがて、

「1年くらいの長編はどうですか」

ということになった。

当時私は、サラリーマンを卒業し、フリーライター宣言をしたものの、そんなに世間が甘いものではなく、気持ちが悪くつき、時間を持て余していたので、何の構想もなく飛びついたのであった。だからろくなものが書けるはずがなかった。手取り早いのが自分の身の回りや過去を人目に晒すこと。作家がよくやる手だ。財産は長いビジネスマン生活。それを下敷きにして妄想を盛り込み、あることないこと、考えてもいなかったことを、ひたすら一週5枚、せつせと原稿用紙の升目を埋め続けた。それが57回。そして頭の中が空っぽと相成った。

もちろん、これが小説家のスタートとは思いがらなかった。下敷きが己の過去だから、登場する人や場所が実在とおぼしきものとかかなり重なった。書いている途中でかつての職場の先輩から「やばくないか」とイエローカードを出されることも1度や2度でなかった。

だから、17年も前のことなどすっかり忘れ、いや、忘れようとし、以来、小説を書きたいとも思わず、ひたすら詩、口に糊するためにエッセイ、いや雑文、ルポなどを書き、放送メディアにしゃっ面を晒し続けてきた。

小説は読むだけ。詩を書いているにしては読む本の約六割が小説。これは余り自慢できない。

数年前に、小説を書いている男性の友人ができた。この人は地方紙の文学賞を受賞しているし、同人雑誌にも所属している。将来を嘱望されている人なのだが、最近書いていないらしい。その理由の一つが、所属している雑誌の仲間が高齢化して作品が書けない。若い人は入ってこない。したがって雑誌が出ない。雑誌に発表するのが大きな目標だから、出なきゃ書かない。この悪循環らしい。言われてみれば今、秋田県内の小説の同人誌は活動しているのかしら。その方面には疎いが、新聞などに紹介されているのを見たことがない。同人雑誌の抱えているもう一つの問題は、大半が私小説で、身の周りのことを題材にして書くから、時と場合によっては、親戚縁者や友人知人に迷惑を掛けたり怒鳴り込まれたりする。

さらに言えば、出費がかさむ。世間の評価がある訳ではないから、女房の顔を伺うのに疲れる。

なによりも、隣の各県に比して、秋田出身の小説家が余り小説を書かない。ここが頑張ってくれば秋田県も元気になるんだがナア。